

《巻頭言》

第11回日本禁煙学会学術総会を終えて

日本禁煙学会 理事、第11回日本禁煙学会学術総会 副会長、
NPO 法人京都禁煙推進研究会(タバコフリー京都) 理事

栗岡成人

秋の彩りが始まった京都に全国からタバコフリー社会を目指す約1,100人の仲間が集まり、第11回日本禁煙学会学術総会(滋賀・京都大会)が開催された。第1回日本禁煙学会学術総会が2007年2月に京都で開催されて10年後、二度目の京都開催となった。この10年を振り返ると日本のタバココントロール対策は、日本禁煙学会の発足・発展とともに遅い足取りではあるが着実に進んでおり、みやこ禁煙学会として開催された第1回大会にも関与したのものとして感慨深いものがあった。

会場の京都テルサでは、今回の大会テーマ「禁煙で伸ばそう健康寿命」を中心に、さまざまなトピックスが取り上げられ、熱い議論が戦わされた。今回のプログラムは、特別講演2題、シンポジウム5つ、特別企画2つ、歯科医師、薬剤師、看護職それぞれのセッション3つ、そして新たに創設された繁田正子賞セッションとたいへん盛り沢山の内容であった。

今回のテーマ「禁煙で伸ばそう健康寿命」については、特別講演Ⅱ「喫煙と健康」とシンポジウムⅠ「健康寿命を伸ばす方策」で取り上げられた。特別講演Ⅱでは、NIPPONデータなど疫学研究で高名

な滋賀医科大学名誉教授上島弘嗣先生が、疫学の基本的な考え方についてわかりやすく解説いただいた。NIPPONデータなどから、喫煙と健康や寿命との密接な関係を示すエビデンスに基づく数多くのデータを示され、健康寿命の延伸にはタバコ対策が重要であることを示唆された。

引き続きシンポジウムⅠでは、循環器疾患を主体として、それぞれの疾患の第一人者から疾病とタバコの密接な関係および疾病の治療法が述べられ、健康寿命を伸ばす方策についてディスカッションが行われた。このシンポジウムをとおして健康寿命を伸ばすには、タバコ対策が最重要課題であることが改めて確認された。

特別講演Ⅰの海外からの招聘講演は、カナダからGeoffrey T. Fong教授をお招きした。Fong教授はInternational Tobacco Control Policy Evaluation Project (the ITC Project)の創設者・首席研究者であり、タバココントロールはタバコ産業とのエビデンスの戦いであり、FCTCの実行にはタバココントロール政策の評価が重要であることを示された。そして主に各国のタバコパッケージの評価を例に、タバココントロールに有効な政策とは何かを具



体的に解説された。

今回、京都で開催されるにあたり、長年防煙授業や若手の育成に心血を注がれ、惜しくも2014年3月に亡くなられた繁田正子先生を偲んで、京都禁煙推進研究会のまさこ基金からの助成を得て日本禁煙学会繁田正子賞が創設され、第1回繁田正子賞セッションが開催された。一次審査で選ばれた最終発表者6名が、セッションで口演した。いずれも質の高い内容とプレゼンテーションであったが、最優秀賞には名古屋の谷口千枝さんが選ばれ、会員懇親会の席で表彰された。

最近問題になっている「新型タバコ」特に「非燃焼・加熱式タバコ」について特別企画が開催され、第一線の研究者から研究成果が報告され、多数の参加者が聞き入った。多くの質問と活発な議論が行われ、「新型タバコ」に対する参加者の関心の高さが伺えた。加熱式タバコについては、ニコチンは紙巻きタバコと同じくらい急速に脳に到達すること、発がん物質などの有害物質は量的には低減しているが、同じ種類の有害物質が含まれていること、公表されていない添加物が含まれている可能性があることなど、決して安全なものではないことが確認された。同時に、加熱式タバコの使用が急速に広がっていることへの懸念が示された。

熊本学会より始められたナースのための禁煙スイーツセミナーは今年も大盛況で早々と申し込みが締め切られた。今回は第二部でワールドカフェ方式が採用され、滋賀・京都のスイーツも楽しんでもらうことができ好評であった。歯科医師、薬剤師の部会が設置され、今学会からそれぞれの委員会が企画する薬剤師委員会主催セミナー：第1回禁煙サポート薬剤師のSolution Seminarと、歯科医師チームセッション 歯科チームで健康寿命を伸ばすタバコ対策の再考—京滋から始める国際標準の簡易歯科タバコ介入—が開催され、それぞれの部会の今後の発展が期待される。

その他シンポジウムでは、さまざまな職場のタバコ対策、受動喫煙防止条例を中心とした地域でのタバコフリー対策の取り組み、大学の禁煙化と大学における禁煙教育、特別企画では防煙授業の実践とその成果についてなど、それぞれの会場で充実した内容の発表・ディスカッションが行われた。共催セミナーも、ランチョンセミナー3つ、イブニングセミナー2つと充実した内容となった。

滋賀・京都大会は、健康寿命をキーワードに現在のタバココントロールに関するさまざまなトピックスを盛り込み、学術プログラム優先、来賓挨拶なし、イベント、アトラクション一切なしという「質実剛健？」の学会となった。そして、おもてなしは京都の秋にお任せということになった。

禁煙学会会員が4,000名を超え、学術総会の予算規模も大きくなり、学術総会担当者の財政的負担が大きくなっている。一方で、協賛企業などの協力が得られにくくなっており、主に参加費によって学会運営を賄わないといけない状況になってきている。学術総会の運営について財政的支援も含めて更なる学会本部および学会員のご協力ご理解をいただけることを願っている。プログラムに関しては、タバココントロールの内容そのものが非常に多彩であるため同時並行のセッションが多くなり、聞きたい演題が重なって聞けないという問題もある。

本大会での新たな課題として、利益相反(COI)の自己申告と会場内写真撮影・録音録画の制限があった。日本禁煙学会ではタバコ産業以外の産業界とのCOIに関する規定が未整備であったが、理事会で第11回日本禁煙学会学術総会から自主申告でCOIを明示いただくという方針が決まった。今回は、第11回日本禁煙学会学術総会実行委員会が定めたCOI自己申告基準を暫定的に使用してCOIの自己開示をお願いした。また、会場内での写真撮影・録音録画を原則として禁止することになったが、情報を拡散してほしいという発表者もあり、どのような場合に許可すべきかについては今後の検討課題である。

今回の学術総会の真の評価もこれからの課題である。学術総会が成功することは、もちろん大きな目標であったが、学術総会開催の最終目的はタバコフリー社会の実現である。本大会がタバコフリー社会の実現にどれだけ寄与できたかによって評価されるべきだと思う。後世からあの学術総会がタバコフリー社会へのターニングポイントであったと言ってもらえるような学術総会であったことを願っている。

これから一年、各地で創意工夫に満ちたタバコフリー活動が行われ、その成果を持ち寄って、次回2018年11月、高松の第12回学術総会でまた皆様にお会いできることを期待して稿を終える。